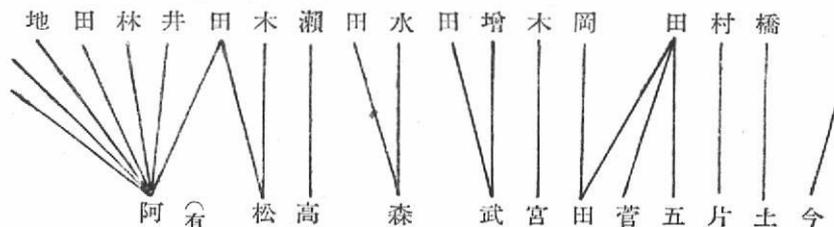


(背負) 大 佐 山 松 (巴投) 齋 (同足拂 大外刈) 伊 今 渡 石 田 三 (腰投 大外刈) 外 (足拂) 小 鈴



塚 藤 木 崎 藤 藤 邊 塚 村 輪 山 山 木
 平 田 塚 小 野 宮 菅 三 木 長 森 阿 大 伊 清 太
 塚 中 (大外刈) 木 (大外刈) 川 (合投) 村 下 川 原 隅 村 塚 (合技) 下 (背負) 部 塚 澤 瀬 田

(大外刈) 湯 天 小 高 (有段者) 岸 茂 廣 高 清 篠 安 茂 西 (大外返刈) 前 中 高



地 田 林 井 田 木 瀬 田 水 田 增 木 岡 田 村 橋
 阿 (有段者) 松 高 森 武 宮 田 菅 五 片 土 今
 (大) 部 (背負, 逆) 本 (大外刈) 鹿 永 (跳腰) 田 永 沼 (足拂) 原 島 山 井 關

(巴投) 進



福



村(足拂)

東



大



葉



田



萩



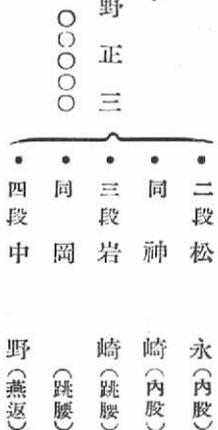
五人掛

二段 津守

純



四段 中野正三

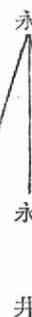


右勝負後見晴亭に送別の宴を張る。出席者六十有餘名、澤山、岡安の先輩も來り、頗る盛宴であつた。本年の卒業生 神崎清一、津守 純、大隅敏雄、中山信市、片山秀次郎の諸氏。

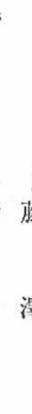
(同跳腰) 森



(小外刈) 副將



(逆手) 大將



(釣込足) 中



山(返技)

中



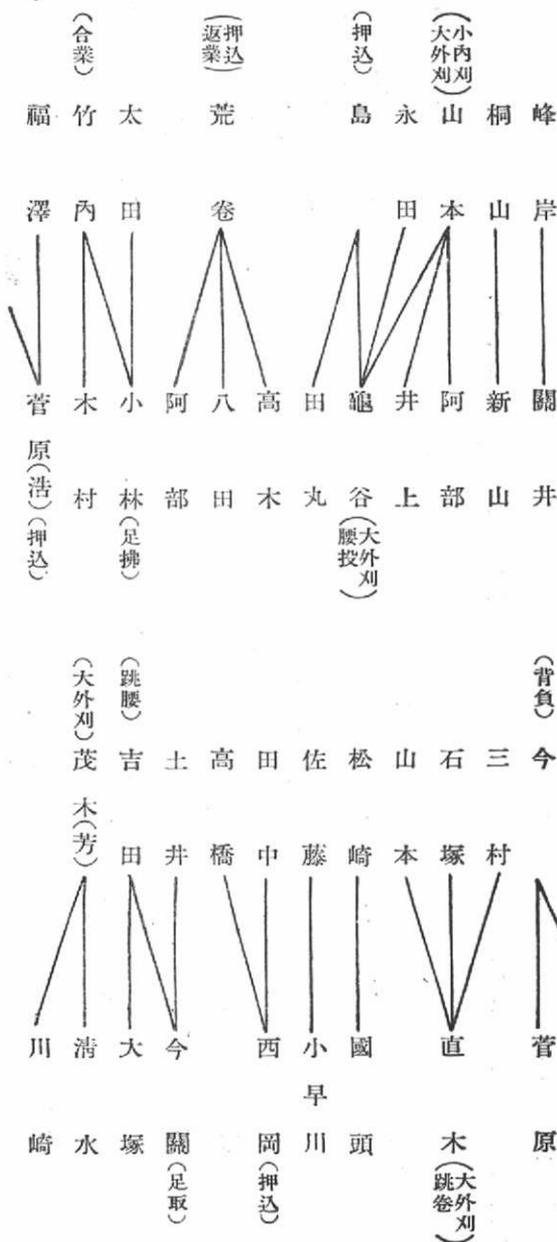
山

(三) 新入生歓迎紅白勝負

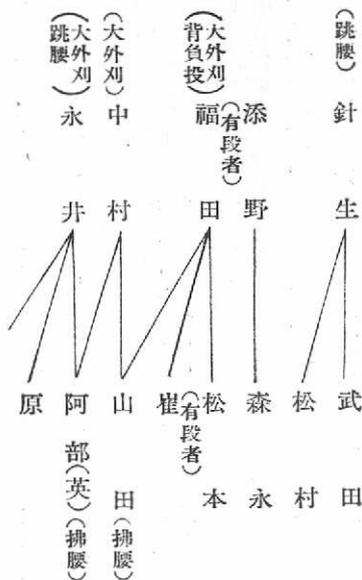
五月六日午前九時より舉行。例年に比して勝負出席者の少なかつたのは、稍々寂寞の感があつたが、試合の活氣は能くその缺陷を補つて餘りあつた。幼年組は引分に終り、成年組は左の如く紅の勝利に歸した。

(紅組)

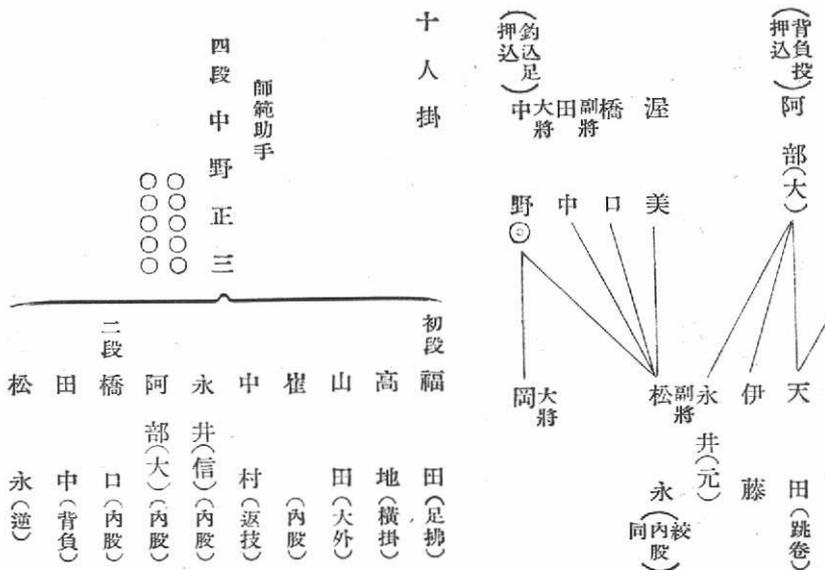
(白組)



五人掛



十人掛



敵も今度こそは會稽の積る耻辱を雪がんと、猛烈なる稽古を勵んだ事であらう。必勝を期して三田山上に押寄せて來た。番組を見ると聯合軍は大將下二段を筆頭に、二段五人初段十七人、段外五十九人合計九十一人。我が軍は松永を大將に敵と同數の精銳を連ね、對陣を見た丈けでも血の湧き立つ思ひがある。午後二時飯塚師範の訓話を了つて勝負は開始された。聯合軍初段出戰以後の戰況左の如し。

(聯合軍)

(本塾)

(前略四十八名)

(前略四十二名)

(釣込腰) 石川清左衛門

森永 義忠

(大外刈) 藤田暢太郎

井上 敏夫

(跳腰) 星子 廉義

吉田 精二(合衆)

山田 久一

阿部 英兒(大外刈)

阿部 國夫

添野 郁

小林 武次郎

伊藤 文健(腰投)

(背負) 早川 要顯

松村 繼彦(足取)

(逆) 二段 五十嵐 豐次

大原 孝太郎

菅井 操

松本 篤太郎

本川 孝三

荒木 本 遜

延 龜 年

菅原 剛寛

副將 戸田 曠

阿部 大六

岩崎 喜三郎

初段 渡部 奉綱

大將 下 房 二

永井 元孝

(押込) 廣瀬 恒美

山田 菊雄

佐々木 平太郎

渥美 得一

豊島 孫六

崔 燦 鶴

藤 澤 隆

副將 葉山 健二郎

(帶落、押込、巴投) 川島 規矩夫

高地 萬里(背負)

大將 松永 進一

福田 與志三郎

福田 與志三郎

福田 與志三郎

福田 與志三郎

福田 與志三郎

番組愈々進み、熱狂せる聲援の中に、出て来たのは敵の初段の先鋒石川、名も清左衛門と云ふて、一寸偉ら相な名である。我が森永出で、屢々跳腰を以て、美事に敵を宙に跳ね上げたが、敵もさる者、黒帯の手前善く應戦して業有りを取つた。「黒帯をこはがるな」など、嗚鳴る者がある、森永優勢であつたが、釣込腰に逢つて斃れ、吉田が代つて出た。吉田腰業を以て二度業を取り、再び巴投を以て業有り、合せて一本を得た。次なる敵星子跳腰にて我が吉田を倒せば、添野は復讐役と成り、背負を以て善戦したが、敵は防戦に努めて剛道を用ひたる爲めか、添野は悲しい哉左の股を挫いて、勝つ可きものを痛み分けとなつた。

敵阿部、我が松村、新に雌雄を決せんと、互に睨み合ふ事暫し、敵が背負を掛けて来たところを松村足取りを以て美事に一本。聲援もそろ／＼眞剣になつて来た。松村一人を倒して安心した爲か、早川に脆くも背負はれ、染谷代つて出で背負や足拂で敵を驚かしたが、互に力が等しかつたか引分と成つた。

次は敵永井と我が松本。興味ある勝負の一つであつた。彼我共に身長高く、睨み合つた時から面白い勝負と思はれた。敵の跳腰大外刈は利かず、我が足拂も効がなかつた。肩車で容易に五六尺も敵の大軀を持ち上げたが、引き手が足らなかつた爲に投げ損じて了つたのは、實に残念。敵も剛の者、大内刈で業はあつたが、松本の方落ち付いた觀があつた。拍手の裡に引分となれば、我が段外の殿軍菅原、敵の延に當る。菅原大内刈で攻め、馬力を振つて敵を振りまわす。敵は大外をかけてはね返されたのに恐れてか、守勢を取つて頑張つた爲め、我よく業を出したるも、引分と成つたのは頗る残念であつた。

太陽は道場中程までさし込んで来た。冷しい風が何處からともなく入つて、紅白の優勝旗を翻々させる。一度鳴りを靜めた聲援は、我が初段の先鋒渡部が敵の岩崎と相對するに及んで、割れん許りに再び鳴り始めた。愈々黒帯同志の勝負と成つたのだ。敵は鬚を生やした頑猛、彼れ押込に來れば、我は鰻の如く逃げて釣込腰で攻めたが、其効がなかつた。敵と

我と同じ位の身長で、敵は仲々の老練者らしく、此方も亦巧者、互に頭を使つて戦つた。渡部危く跳腰で飛ばされ相に成つたところを、猿の様にヒラリと逃げた。一寸巧妙な所を見せた心算であらうか。敵の背負も利き目なく引分けとなつたのは、共に巧者であつたからである。

我が山田、敵の廣瀬、さし込む夕陽を浴びて現はれた。如何したはずみか、吾は上四方に確かと押へられて了つた。逃げ様としたが敵も仲々押へを堅めて、遂に三十秒は過ぎた。崔代つて出づ。背負と足拂で屢々敵を脅かしたが、敵も或は腰業を出し、或は巴役に來り、或は帯に手をかけて戦つた。斯くして聲援の中に引分と成れば、高地と敵豊島とが之に代つた。敵は大兵肥満の大男、我が小兵の高地は、相手の隙を窺ふ中にすきやありけん、ヤツと云ふ聲諸共背負に飛び込み敵の大軀をドシンと飛ばした。次の川島、高地が業を掛けて自ら倒れたる時、之を抱き上げて投ぐ。業ではなく力であつたが一本となり、福田が代つて出た。

夕陽既に薄れて、淡靄が外を覆ふた。パツと赤い電氣がついて、選手の顔はあかるくなつた。敵川島仲々落ち付いてゐた。福田を上四方に押込んで、再び肩固に變りて破り、井上とも火花を散らして戦ひ、之をも巴に倒した。敵は三人を倒して意氣益々揚つたが、阿部（英）が向つた時は、一同心強く思つた。敵は餘す所僅に二段五人、我は未だ十一人を餘してゐる。阿部は拂腰に行つた。敵は疲れてゐたが、尙幾分の元氣を残して之に應じた。が、足拂で業を取られ、大外で最後を遂げた。一と溜りもなく阿部に虐待されるだらうと思つてゐたが、少しでもふんばる事の出來たのは、敵乍ら天晴れであつた。藤田奮然阿部に向ふ。英ちゃん拂腰や大外を以て敵の膽を寒からしむれば、敵も足拂を以て攻勢に出で、互に業を取りしが、阿部拂腰を返されて、合せ業にて倒れたのは、如何にも惜しき負であつた。山田次いで現はれる。小軀ではあるが業士である。我は送足拂に業を取れば、敵も跳腰で業を取り、結局引分けとなつて、我が小林は敵の二段五十嵐に當る。敵も味方も角力を善くするもの、帯を取つて四つに組む。我に充分の勝味があつたが遂に敗れて、伊藤が小林に

代つた。伊藤も亦跳腰に敗れ、大原は友の敵と飛び出した。見る間に腰投見事に極まり、敵の四將本川は、残り少なになつた。味方の兵數を悲し氣に眺めながら大原に向つた。大原腰に攻め寄つた敵を抱いて、敲き付けたが、惜しい哉業有り過ぎなかつた。時間があれば此方のものであつたが引分となつて、敵の三將荒木、阿部（大）と争ふ。おなじみの仁王姿の敵は、阿部の爲に幾度も辛き目に逢された。敵の跳腰にびくともしない阿部は、足拂で殆んど一本取つたが業有りであつた。更に得意の背負と、足拂とで業を重ねて、敵を危地に陥れた。敵は大將副將を残すのみとなつたに引き替へ、我は尙六人を餘してゐる。審判の我が飯塚先生は之を引分としたのに理由があらう。

敵副將戸田と、我二段の先鋒永井（元）、双方落ち付いた態度で現はれた。互に業を出し合つて居る内に、敵は上四方固に攻めて來た。我はクルリと身をかわして、反對に上四方に押へて行く。敵も副將、全力を盡して漸く起き上つた。併し既に疲れた色が見えてゐた。永井業ありしも遂に引き分けとなる。

敵將下と我が五將佐々木とが現はれた。彼は大將だけに自重の様子である。佐々木の手が誤つて彼の面部にピシヤリと當つた。彼がまごついてゐる所を、佐々木得意の跳腰でボカリと飛ばした、これは一寸餘興の心算。我は小外刈、跳腰を以て業有り、敵も好く戦つたが、我の比ではなかつた。結局引分と成つて、我が軍は例に依つて例の如く、茲に六度び勝利者と成つた。時正に午後七時二十分。

(五) 遠征準備稽古日誌

松 永 進 一

我柔道部は第三回關西遠征を、九月下旬の休みの續くのを機會に決行する事になつた。第一回の遠征は十數年前藤崎、

吉武兩先輩等の時代に舉行され、第二回の遠征は去年の春やつたのであつた。第一回の時の様子はよく知らないが、第二回には京都武徳會に於て、又大阪支部に於て、共に敗北の結果に終つたのであつた。而して愈よ來る九月下旬第三回の遠征を舉行する事になつたのであるが、我々柔道部選手の末席をけがす者にあつては、先輩の熱誠なる應援に對する感謝の念、並に去年敗北の名を雪がん爲めの體たたる勇猛心が總てを燒きつくして、此所に我柔道部スピリットと融和して選手三十名の團結となつたのである。膚をつんざく様な寒い冬の朝、炎熱灼くが如き夏の日、共に道場に遊んで趣味を同じくした三十名の選手が、一致團結して九月一日より二十日間の猛烈な稽古をなし、二十一日より向ふ五日間關西遠征の途に上ると云ふ此事は、古今日本の柔道史を通じて特筆大書すべき一大壯舉ではあるまいか。又此舉が學生界に及ぼしたる體育的思想の普及に至つては、僕が今此所に述べる必要がない。が省みて僕の立場から此壯舉を考へて見る時、唯痛快だつたと云へば其れで足りる様だが、未だ未だそんな形容詞位では中々表し切れるものではない。七月の暑中休暇の前に、愈々遠征をやる事が決つた時から肩が重くなつた様な氣がしてならなかつた。然し其れはすぐ、身を鍛え元氣を養つて置かなければならないと云ふ考へに轉じて、僕は思出多い且つ愉快な葉山の水泳部生活に一ヶ月半を送る事にした。葉山生活は全く無邪氣に暮した。毎朝淺間山に上つて葉山の海を眼下に見下して深呼吸をやつたり、我を忘れて大聲で怒鳴り散ら、若し己れの聲が海の中に突立つてゐるあの大櫓に居る奴に聞へたら随分痛快だらうなんて、小供の様な事を考へたりして、腹の空いたのに氣がつくと、どん／＼寄宿舎へ歸つて行く。或時はさざへ取りに行つたり、セーリングをやつたり、シケで大櫓が流されると、岩頭に行つて其腹いやせをしたり、寢室でひよん様の皮肉を聞かされたり、先輩下川君の毒舌を拜聴したり、瀧川君の……おつと失敬、何しろ夕飯後の森戸岬の散歩は、實に氣持ちがい。毎夕其景色に變化がある事や、涼風に吹かれ乍らコーラスに時を忘れる。此處は全く葉山生活にはなくてはならない所だ。

まだ／＼葉山生活は多事だ。朝海から歸つて來ると、午飯をかき込み午寝をしなくてはならない。福澤様の芝生で相撲

を始める鐵彈を投げる。鐵彈では染谷君が氣を吐いた。が砂運びの勇士も亦砂村の染谷君だつた。

思ふ存分遊んで、腹一杯食つて、寝度いだけ寝て、葉山生活は八月三十日で終つた。此樂しい、無邪氣な、壯快な生活によつて目方は約一貫目増した。此の満ち／＼た元氣と張り切つた身とを以つて、愈よ來る九月一日からの稽古に参加するのであると思ふと、唯無暗に身が振へる様な氣がしてならなかつた。

九月一日

道場へ行くと既に規定の時間に間がない、規定時間は午前八時より拾時迄と黒板に書かれて居る。

永い休みの間稽古をしなかつた道場は何となく物待ち顔に見えた。二ヶ月間の永い休みの間、責任と云ふ男子の面目を全うして、勇々しく道場につめかける三十餘名の選手諸兄の顔面には、期せずして潑刺たる元氣が表はれ、勝たんが爲めには如何なる苦しい稽古も斷じて辭さないと云ふ覺悟が見えた。先づ中野君の稽古上の注意があり、次で先生の遠征についての訓話があり、やがて海に、山に、或は講道館に、或は秘かに國の道場で鍛へて來た腕試しの第一日が始まる。三十有餘名入り亂れて猛烈に申し合ふ。只さへ九十度の暑さに、此猛烈な稽古の熱の爲めに、寒暖計は十度位上つた様に思はれた。此熱烈なる意氣は既に敵軍を呑んで居る、本日出席者左の如し。

有段者 飯塚先生、中野森藏、岡 善次、松永進一、涙美得一、田中祐吉、岩垂捨三、永井元孝、葉山健二郎、佐々木平太郎、阿部大六、鳥居忠雄、永井信二郎、山田久一、阿部英兒、井上敏夫、福田與志三郎、崔燦鶴、山田菊雄、菅原剛寛、松本篤太郎、渡部奉綱

有級者 染谷芳藏、五島一男、宮永金太廓、清水行信、針生五郎、安部 昇
合宿は有志者でやる事にして場所は體育會ホールに定めた。

中野君と僕は應接間へ寝る事になつた。と云ふと安つぱい様に聞へるが、嘗て米國の某大學の野球チームが日本を訪ね

た時、塾で買つて彼等を待遇したと云ふ氣持ちのいゝスプリング付きベッドを並べて、稽古に疲れた身を其上になげると大ホールの屋上高く懸つて居る十日頃の冴えた月が窓を通してベッドを訪れてくれる。二人は『いゝ月だね。』『さうだ餘り月がいゝんで寝るのがをしい様だね。』中、『然し己れは如何しても今度の遠征は負ける様な氣がしないよ。』松、『己れだつてさう思つて居るが、何と云つても稽古が第一だから、出来るだけ稽古を眞面目にやらう。其れには何か奨励法を考へなくちやならない。』と云ふので、早速次の日から其れを實行する事にした。涼風に吹かれながら、静かな三田山上合宿第一日の夢路を辿る。

岡、針生、崔、茂木の四君は二階で寝た。

九月二日

合宿での協議が調つて、關西遠征稽古精勤一覽表を作つた。此は單に稽古奨励の爲め而已ならず、三十餘名の選手の努力を汗と一緒に流しつばなしにせず、思出の種に道場の押入れにでもしまつて置かうと思つたのである。暑さも烈しいが稽古も盛んだ。珠の様な汗が二時間も續いて出るのだから、飲物を制限するのは反つて衛生上よくないと云ふので、三田通りの藥屋から食鹽一ポンドを買込んで、御湯に入れて吞むと云ふ事にした。稽古の後で身を洗つて、鹽湯を一盃飲んで、グラウンドに出てスタンドに上り、新鮮な空氣を肺の底まで入れる、涼しい風が蜂須賀の森から吹いて来る、極樂風とは全く此事を云ふのだらう。

本日缺席者 渥美得一、松本篤太郎

新出席者 茂木芳次郎、小林武次郎、添野 郁

他は一日通り。

合宿は安部登、藤澤隆の二君を迎へて賑かになつた。

九月三日

九十度の暑さと猛烈な稽古に張りつめて居た元氣も身體も、少し疲労して來た様だが、稽古の熱度は下らない。二時間半の稽古に珠の汗をしばつて、幼稚舎の賄に美事なる鯨飲馬食振りを示して、賄の親父デブ公の舌を巻かせて、一同山の上の涼しい合宿に引き上げて來ると、瞬間の間に寢室は満員の盛況で、皆々申し合せたやうに四時頃までグツスリ寢込んで終つた。

夕飯が終ると皆で散歩に出懸けた。合宿では早く寢なくてはならないのが不文律になつて居るのに、崔君と茂木君が活動寫眞を見に行つて拾時半頃歸て來た。二人の寢室に當てられた柔道部の室へ行つてカヤの中に入ると、安部登君が場所を占領して白河夜舟の最中だ。二人は安部様をゆり起して盛んに寢權を主張すると、隣りに寢て居た岡君が目覺し、少し癩の虫が活動したので大喝一聲『五月蠅!!』とやつたので、二人はもう之れまでと、己れの方の武器は此れだ、よく見て置けばばかりに、蚊帳をまくつて蚊軍を利用して敵を攻め立てた。此れは茶目公の惡戯記として合宿日誌に残つて居る。翌朝起きたら二人の茶目は水泳部の室で寢て居た。

缺席者 松本篤太郎、小林武次郎

新出席者 高地萬里、岩崎清二郎、松村織彦

九月四日

昨日からそろ／＼疲れが出て來た様子だが、道場内には嫌意の色は見度くもない。暑さ位は何のそのと踏張つて居る。玉なす汗は眠をむさぼつて居る亡國の民の藥に飲ませ度い位だ。又しても合宿では面白い一幕が演ぜられる。午の疲に九時を過ぎた合宿は全く寢靜まつてしまつた。拾一時頃誰か一人歸つて來た。少し氣がひける爲か温順しく靜かに二階へ上つて行つた。其れから暫時して誰か二階から下りて來た氣配がしたかと思ふと、僕の室のドアの鍵が異様の物音を立て

る。其時僕は先生遅く歸つて来て寢床を占領されたものだから、僕の室へ来たのだと直観したから「誰だ」と怒鳴つたら、「藤澤だ」と答へる。其儘又黙つて二階へ上つてしまつた。僕の室へ泊りに来たのなら名だけ云つて二階へ上るのは變だ、一體如何したんだらうと思つてる内に睡魔がおそつて來た。

翌日起きると昨夕の事は合宿の不文律を破つたのだから、早速一發見舞つてやらうと思つて居ると、逆に夕べの出來事を知つて居るかと思はれて、煙に巻かれた態で更に要領を得なかつた。其後S M名探偵の手腕によつて、其夜の事件の真相が次の如く發表された。

夕べ拾一時に歸つたのは針生五郎君で、僕の室へ來たのは確かに藤澤君だつた。却説藤澤君が僕の室を夜更に訪ねた其處に此事件の真相があるのだ。二階の柔道部の室に寢て居る、藤澤、岡、安部、針生の四人が、午の間に僕の室に置いてある葡萄酒をマークして置いて、僕と中野が寢て居る間に失敬しようと云ふ計畫だつたさうだが、折悪しく丁度來た處を見付かつたのださうだ。悪い事は出來ないね、と示談で笑の内にこの事件は解決した。

新合宿者 宮永金太郎

九月五日

稽古が終つてから有段者有級者の猛者連が集つて、師範を圍んで技の論戰に時を忘れた。

當日は熱心なる先輩中村愛作氏が稽古を見物に來られた。僕は同氏の此道場訪問が我等の奮起を大ならしめた事と、深い慰安を選手に與へたと云ふ意味に於て、深く感謝して已まない。

新出席者 高井孝一、柿元 魁

九月六日

稽古の最中に森様がやつて來た。可愛い、弟を喪つた同兄が、關西遠征の爲めに特に萬障を繰り合せて、部の爲めに早

く上京してくれた事、上京後は遠征に關する一切の事務を、菅原と二人で滞りなくマネージし、選手一同をして出來得る限りの奮闘を盡さしめた君の勞に對しては、一同深く感謝に堪へない。

本日揭示板に七日講道館行きと書かれた。同じ相手ばかりで少しあきたので、明日は講道館を訪ねる事になつた。講道館の頑猛連中に三田道場の腕の冴を……と云ふ意氣込みで、明日を楽しみに合宿では八時頃から寝た。

九月七日（講道館行）

森 久 則

午後二時前には略々顔が揃つた。先生は先きに行つて居る筈で、薩摩原から乗らうと一行二十八名元氣よく出かける。風が強くて中野御大の帽子が美事溝の中へたゞき落されたが、もう兜を脱いでかゝれば此方のものだとは、君でなければ出ない頓智だ。

講道館の表支關から通つて道場へ入ると、意外にも黒帯の数が少ない、全く寥々たるものだ。我々一行がすっかり道場を壓倒した觀がある。是れぢや來た甲斐がないと云つて居る内に、追々黒帯の姿が見えて來た。またゝく間に靜かだつた道場が一變して修羅の巷と化した。折角來たんだから元を取れと云はんばかりに奮闘した。然し最後迄三段四段連中が影を見せなかつたのは頗る物足りなかつた。

一級諸君が能く黒帯を相手に廻して、些の遜色なく奮闘したのは實に快心の至りだつた。

四時半頃汗で八割方重くなつた稽古衣を提げて歸途についた。歸りの電軍中の氣焔は萬丈當る可らずで、結局二三日中に又行かうぢやないかと云ふ事に定まつた。眞直に歸つた者と銀ブラをする者と日比谷で別れた。一行左の如し。

飯塚師範、中野森藏、岡 善次、松永進一、藤澤 隆、永井元孝、葉山健二郎、佐々木平太郎、阿部大六、阿部英兒、田中祐吉、永井信二郎、山田久一、井上敏夫、山田菊雄、渡部奉綱、鳥居忠雄、五島一男、針生五郎、宮永金太郎、吉田精二、清水行信、阿部 登、小林武次郎、添野 郁、松村繼彦、三村徳五郎、高井孝一

九月八日

天氣は毎日打ち續く、暑は仲々去り相もない。稽古後師範より寢業の話を書く。午後は大阪、京都兩武徳殿と、先輩諸君の處へ遠征についての通知を發した。

中野正三氏は病氣で後十日位は稽古が出来ないと云ふ通知があつた。御氣の毒な事である。一日も早く回復されて三田の道場に我等を指導されん事を切望する。

九月九日

定刻八時半には相變らず元氣な顔が揃ふ。當日は熱心なる先輩徳永秀夫氏が見えた。暫時は稽古を見物して居られたが昔取つた杵柄と云ふ勢で稽古された。御厚志深く感謝致します。稽古を九時半頃切り上げて、師範の遠征の由來及び意義に關する訓辭があつた。

客歲の失敗より説き起し、之れが爲めに今回の遠征を決行するに至りし所以に及ぼし、更に進んで今回の擧は單に一箇の復仇戦に甘んぜず、近くは六千の健兒廣くは七千萬の同胞に柔道の眞髓を知らしめんとするにある。然らば柔道の眞髓とは如何、柔道は世人の云ふ如く、單に一箇の運動或は遊戯にあらずして、柔道によりて、日本國民たる自覺が、明瞭に頭に刻せられる。其處に柔道の眞價がある。此意味に於て、柔道は大なる目的に對する手段であつて、日本國民たる者は、柔道によつて明瞭なる國民的自覺を體得せねばならぬと云ふのである。此の如き大抱負を以つて我等は起たんとして居るのだ。稽古の猛烈なるも、意氣の壯なるも、亦疑ふに足らぬではないか。

日曜日だつたので野田市太郎君が世田ヶ谷から道場を訪ねてくれた。相變らず元氣な同君は、久し振りに稽古衣をつけて、道場に一層の景氣を添へてくれた。

久し振りに雨が降つて、大變涼しい風が見舞つてくれたので、一同蘇生の思をした。

九月十日

今日も雨天で、大變涼しいので稽古は樂だつた。

高鹿君が訪ねて來た。元氣相だが未だ稽古は出來ないとか。病んで猶便々たる腹の所有者は君ならで他にはあるまい。然し其大部分は葡萄酒液であります。

缺席が多いが、稽古は更に猛烈の度を減じない。寢業研究の盛になつたのは、今度の稽古の著しい特色である。前は投げ放して置いたのを、今は直ぐ嘯り付いて固め業に攻めると云ふ風で、稽古には一段の進歩と興味を加へた。

銚子に病を養つて居た岩崎君が歸つて來た。君は未だ稽古は出來ない、大分やつれて居たやうに見受けられた。卒業する迄には是非昔の岩崎になつてくれ給へ。

中野君が身體中の筋肉が張つて困ると、其張りが解けると眞個の元氣が出るんださうだ。

五人掛で昨日最後に山田久一様から押へられた岡君、大いに憤慨して今日は寢業の肩の工合の練習だと、獨りで道場一杯にのた打ち廻つた。

九月十一日

朝から雨で烈しかつた殘暑も何處へ行つたか、大變涼しくて稽古にもつて來いと云ふ上天氣、稽古過度と暑さから來た疲労も殆ど恢復した。明日は又講道館行きと決定した。

中野助手が病氣の爲め止を得ず稽古に來られない。然し飯塚先生の熱誠込んだる指導に、道場の空氣は未だ嘗て見ない緊張した氣分を現はして居る。其先生の御顔が今日道場に見えなかつた。

大阪武徳會支部から快諾の返事が來た。

九月拾二日

引き續いて雨が煙つて居る。

第二回の講道館行、三時に道場出發。講道館も前の時と異つて仲々賑つて居た。三段四段の連中も可成り見えた。各自精一杯の稽古をする。一級連中は元氣當る可からず、有段者虐待で嘸ぞ溜飲を下げた事だらう。

岡君の倉田四段や馬場三段との對戦も頗る見物だつた。特に馬場君との對戦に、絞めに落ちた所などは君の面目を躍如たらしめて居る。

今日の講道館の稽古を見ると、皆一段方腕を上げて居る。初段の山田菊君阿部君の二段虐待や、松永君の三段虐待は見居て氣持がいい。引き上げたのは五時。歸りに三縁亭で幹事會を開いて遠征の打ち合せをした。

九月拾三日

未だ降り續いて居る。稽古する者にとつては實に幸福だ。もう愈々切迫して來たが、大分體を痛めた人もある。中にも永井君の盲腸發病は、切角今まで步調を揃へて來た我々にも残念此上ないが、本人にとりては尙更の事と深く同情に堪へない。葉山君佐々木君藤澤君渡邊君も腸を害する。腸を害した連中は自重する事にしたが、一方元氣な連中は盛んに稽古をした。

學校が始まつたので、朝の稽古は午後三時から四時半迄と改めた。

九月拾四日

久し振りで晴れたら又暑さが盛り返して來たので、稽古は玉の汗をしぼつた。稽古後師範を取り圍んで業の研究に時を費した。

九月拾五日

今日あたりからは稽古はみつしり二三本やつて自重する事にした。

愈々選手の名が發表された。

(四段)中野森藏、(三段)岡善次、(二段)松永進一、藤澤隆、葉山健二郎、永井元孝、渥美得一、佐々木平太郎、田中祐吉、阿部大六、(初段)崔燦鶴、山田久一、阿部英兒、小林武次郎、福田與志三郎、高井孝一、山田菊雄、渡部奉綱、井上敏夫、松本篤太郎、(一級)針生五郎、五島一男、添野郁、吉田精一、宮永金太郎、染谷芳藏、松村繼彦、武田正俊、安部登、柿元魁、以上三十名、(世話係)森久則、菅原剛寛、岩崎清一郎、合計三十三名

九月拾六日 (玉川遠足)

今日は稽古を休んで玉川へ一日の清遊を試みた。

濕っぽい天氣が続いて居る。九時と云ふのに皆揃つたのは十時過ぎ。豚の來るのを待ち兼ねて道場を出たのが十時半頃だつた。澁谷まで市電で、其處で玉川電車へ乗る。團體三割引の切符を買つて居る内に、豚を持つて來た連中とも一緒になつた。一行二十四名、一車を買切つて雨の中を玉川へ飛ばす。往きには腹が空つて居た爲めか、柄にもなくすまして居たのか、至極大人しく終點へ着いた。葱や豚を下げ乍ら休憩所を物色する。相手の悪いのを知るや知らずや、盛んに御上りなさいを連發して居る。一行の休憩所は月の家と云ふ家に定まつた。委員長は先づ持參の葱と豚を提供して料理を命じ、飯七升を炊かしめる事にした、時に午後一時。空腹を我慢し乍ら川岸に立てられた假小屋へ毛布を敷かして陣取る。煙る雨の中を玉川が夢の様に流れる所は云ふ可からざる詩趣がある。況や笠に簍つけた渡守りが、身に餘る長竿を繰る下に蛇の目の竹むあたりは、玉川の風趣を揚げる事數段である。

五日ならべ、朝鮮碁、或は師範を相手に論戰する連中もある。二時半頃飯が出来た。本家の二階へ上つて、二十四名揃つてスタートを切つた。ピツチの早いのは飛行機のプロペラ位、遅いので風車位な處だつた。何しろ思ふ存分食つた。愉快で美味かつた。こうして遠征第一歩の腹を調へた。當日特筆すべきは宮永君のねばり方である。君の柔道もあのねばり

を加へて來たら二段三段何のそのだ。

食事を終へて再び前の假小屋に歸り、滿腹に寝ころんだり蠻聲を臆面なく張り上げたり、五目をならべたり、思ひ／＼勝手な眞似をして治外法權の中に半月の鬱氣を散じた。先生寄附の梨は、食後の果實として賞味された。此の如くして自由の天地の興は盡きないが、中野御大よりの遠征に關する注意があるので、再び本家の二階へ引き揚げた。中野君は何となく慎重な口調で次の様なことを談じた。

(一) 出發二十一日午後八時、(二) 服裝制服、黒ソフト、(三) 費用六圓、(四) 遠征中は一切團體行動の事、(五) 二十四日京都武徳會試合、二十五日大阪武徳會試合、(六) 二十六日歸京。

別に異論もなく右の如く決定した。服裝の算段に頭を悩す氣の早い連中もあれば、投げ業の研究をして居る者もある。引き揚げたのは四時半、歸りの電車の中は實に無邪氣に騒いだ。

九月拾七日

前日の清遊で元氣の出た人と、調子の抜けた人とが相半ばして居る。元氣な人は適度に食つた人で、調子の抜けた人は食ひ過ぎた連中だらう。

中野様が見えたが未だ體が悪いとの事、残念の至りだ。

九月拾八日

缺席者が多いが皆軽い腸である。唯永井信二郎君の不參加と、佐々木君の足の傷の治らないのは、返す返すも残念だ。三週間足らずの稽古とは云へ、稽古の一本一本が眞剣だつたので、少し位は意を安んずるに足る様な氣がする。稽古の數も餘程減じまし、猛烈な申し合ひもないが、膏は充分乗つて來て居る。

九月拾九日

今日を稽古の最終日と定めた。道場には別に變つた事も起らないが、何となく選手一同色めいて居る。三十人の心は一人の心の様にピツタリ合つて居る。此堅い團結は關西軍のみならず、如何なる大敵に遭遇しても負けない氣がする。僕は此時始めて一致團結の眞の力を知る事が出来た。噫々此強い力、謂はんとして謂ひ得ざる此精神、此處に我等の血を躍らす無限の愉快があるのである。

此強い力、此愉快が、吾人の學生時代を飾る思出の最も深いものとなるのであらう。終りに、過る三週間の稽古に皆勤した人と稽古の數を記さう。

中野森藏(七拾八本)、岡善次(七十四本)、松永進一(七拾本)、阿部大六(九拾本)、田中祐吉(六拾九本)、阿部英兒(八拾六本)、山田久一(八拾九本)、五島一男(六拾八本)、針生五郎(八拾四本)、宮永金太郎(百本)、吉田精二(八拾八本)、阿部登(六拾二本)、以上拾二名(平均七拾九本)

(六) 關 西 遠 征

菅 原 剛 寛

關西地方に二度遠征を企て、利あらず、慶應柔道軍何かあらんとの考を一般に懐かしめたるを聞き、當時の事情を語り聞かせんも無駄のこと、先づ鎧袖一觸彼等を破り、世人をして我が部の眞價を知らしめ、更に大きくしては慶應義塾の名譽を挽回せんとの議が一決した。

體育會各部の同情と、先輩の後援を以て愈々九月下旬出發するの計成り、三十有餘名のベストメンバーを組織して、九

月一日より三週間、毎日朝八時より十時まで、綱町道場に於て稽古を勵んだ。而してその間二日間下富坂講道館に行きて新者と稽古し、自信を付け、必勝を期して臥薪嘗膽腕を練つた。これより遠征の記事に入る。

九月二十一日、天氣晴朗なり、征途の幸先好しと一同は午後六時最後の稽古を終りて、東京驛に向ふ。制服に黒ソフトといふ服裝、八時發の急行列車に乗車す。プラツトホームには病氣の故を以て一行に参加する能はざりし中野助手、柔道部先輩の佐野、神崎、菅井(邦)、中山の諸氏を始めとし部員、水泳部、野球部、劍道部の諸君の見送らるゝあり、水泳部からは果物を送りて激勵せらる。八時吾等に乗せたる列車は、見送の人々の萬歳の聲に送られて搖ぎ始む。新橋品川を過ぎれば東京に暫くの御別れなり。

(一)

風颯々の武藏野に

秋空高く月澄めり

鷗群飛ぶ品海に

金波銀波搖ぐ時

此處城南秀麗の地に

燃ゆる血汐を誰か知る

見よ三十の桑の弓

聞け丈夫の矢叫の聲

(二)

臥薪嘗膽一年に

鍛へし腕此處に在り

比叡生駒の強兵の

黒金なせる鐵腕も

武藏野すさぶ荒風に

折れて碎けて平伏せよ

見よ三十の桑の弓

聞け丈夫の矢叫の聲

と遠征に上るの歌を合唱し征途の幸運を祈る。普通の旅行と異り選手としての責任があるので、自重して直に睡眠す。

一行は師範飯塚七段引率の下に選手として四段一名、三段一名、二段八名、初段十名、一級十名、補缺一名(茂木)之に世話係二名(森、菅原)隨行して總計三十四人なり。

琵琶湖に昇る朝日を賞し京都に着せしは翌日午前九時六分。先輩吉武氏在京阪神先輩を代表して出迎へられ、驛の中央亭にて前祝を受く。電車にて三條小橋に至り龜屋旅館に投宿。廿三日は午前一寸手ならしの爲め武徳殿にて稽古をなす。

廿四日午後二時半、京都武徳會本部軍と佐村、飯塚、磯貝三氏の審判の下に試合を開始す。吾軍奮闘、始終優勢を持ちたりしも、終りに近づいて形勢互格となり、遂に大將戦に入り、兩將秘術を盡して戦ふ事二十分、中野業有りを取りしも一本を取るに至らず、遂に引分けとなる、残念此上なし。左に勝負表を示さん。

引分時間段外六分、初段八分、二段十分、副將十五分、大將二十分。

(本塾)

(武徳會本部)

安部 登

高木光之助(内股)

崔燦鶴

山下亦一(絞)

柿元 魁

佐伯彌三郎

高井孝一

長石俊男(合技、跳、背負返)

(合技、押込、背負)

宮永金太郎

坂井倉太(押込)

高井孝一

道端 徹(背負返、足拂)

武田 正俊

松平直仁

高井孝一

三芳保郎

添野 郁

赤川壽太郎(絞)

山田 菊雄

三鍋義三

吉田 精二

横山 敬正

阿部 英兒

山本 正一

松村 繼彦

福島幸二郎(絞)

阿部 元孝

榎原 紋吉

(跳卷、小内返)

五島 一男

山田 茂實

阿部 大六

須藤新太郎(小内列)

針生 五郎

高橋 信好

田中 祐吉

天野 半(合技)

染谷 芳藏

黒萩 敦英(絞)

渥美 得一

河野 益男(絞)

(巴投)

渡部 奉綱

河村 重隆

葉山健二郎

山口 孫作

(裏投)

小林 武次郎

安藤 榮

藤澤 隆

公文 盛義(背負)

(跳腰)

松本 篤太郎

戸次雄次郎

松永進一

北川 艇二(大外列)

山田 久一

志戸本節二

岡善次

三村 貞吉

勝負終了後事務室に於て晩餐の饗應あり、打寛ぎ雑談する事暫時、辭去して吉武、平賀、川口の諸先輩に案内せられて

京都驛より汽車にて梅田に着、瓢屋旅館に入る、時に十一時。再び夕食を喫し入浴後就床す。明れば廿五日毎日新聞に昨日の勝負、飯塚師範の話等掲載さるゝあり、體育會本部に送りて動靜を報ず。正午は義塾卒

吉 田 小林 卓

松 村 山本 多吉

五 島 山本 加二郎

針 生 淡路 正信

(足拂返) 染 谷 高穂 辨二郎

渡 初段 伊 藤 清

部 加納 烏松

矢木 爲三

(内股) 裏投 小 林 富田 秀雄

岩下 敬次

本 村上 磯助 (袈裟固)

(合技) 山 田 (久) 鷺尾 吾平 (釣込足)

(大外落) 大内刈 村方 敬三

(足拂) 森田 保二

井 上 佐々木庄三郎 (後絞, 同)

福 田 竹垣 富藏 (小内刈)

(小内刈) 山 田 (菊)

(小内刈) 阿 部 (英)

永 井 副將 磯島 兼之助

阿 部 (大) 中 美 澤

田 阿 部 (大) 井

渥 美 澤

葉 山 美 澤

(小内刈) 藤 澤

(合技) 松 永

副將 三 段 岡 野

大將 四 段 野

左絞 四方内 左内 返股 腰

直に支度をなし、辭して柔道部先輩の歡迎會に臨む。會場は名譽軒なり。大阪三田會にても歡迎會催さるゝ筈なりしも。時間なきため辭す、其御厚意は感謝の至りなり。此夜の主人役は平賀、金澤、吉武、川口、土井、關、杉、倉田、松尾、高橋、津田の諸先輩なり。新舊部員一堂に會して歡談に花を咲かせ、飲むに従ひ食ふに連れて興益々深く、その間演説あり、希望あり、喜びあり、懷舊談あり、興味津々として盡くる所を知らず。然れ共明日は神戸の試合あり、十一時半記念

の寫眞を撮影して解散、阪神電車にて神戸に向ふ。

此晩は須磨の内田信也氏別荘にある道場で稽古し、翌日神戸に至る豫定なりしも、大阪の勝負の餘りに遅延せし爲遂に其暇なく、神戸諏訪山なる吉野館に泊す、時に午前二時なり。熟眠する事を約して床に就きしは殆んど三時。

廿六日 白稱孤兒院の一子の大道演説の聲に目覺むれば、日は既に中天に輝く、急ぎ朝食を了れば、正午を報するドンは響き渡りぬ。海岸に、諏訪山に、思ひ／＼に散策を試むるあり、晝食を喫して武徳殿に至る。慶應對内田順道館柔道勝負との立札あり。其の約に違ひ、順道館員に非ざる人も加はり居るにも不拘、猶順道館との試合の如くせるに驚き、交渉の末、神戸有志として行ふ事となり支度をなす、時計は四時十分を示せり。かく一行が開始を延ばし、見物人をして迷惑せしむる事となるを確認し乍ら、猶此舉に出するの餘儀なきに至らしめしものは、實に個人の道場と勝負するのが、第一今度の目的にあらざるのみならず、吾等は體育會の一部として立つ以上、輕卒な行動は出來ずとの考より、交渉に時間を費やし、趣旨を貫徹せしめたるものなり。

試合の経過は次の如く引分に終りしと雖も、健闘以て神戸人を驚かせし事少なからざるを信ず。
引分時間 二段以下七分、三段十分、副將十五分、大將二十分。





勝負を終へたる吾等は、別館階上に案内せられ、立食の饗を受け、十時辭して神戸驛に到る。驛長の好意により一車連結せしむることとなり、かくて一人一席を占領す。ブラツトホームには先輩を始めとし、山下汽船運動部、内田順道館の方々見送りとして來られ、車中の徒然にとてビール、サイダー、果物等を惠送せらる。其御好意感謝の外なし。

かくて東海道を夜中に過ぎて品川驛に着すれば、岩崎、西澤、橋口、高橋の諸氏は二個の花輪を持つて迎へらる。東京驛には更に多くの人々の出迎へらるゝあり、打連れて成田寫眞店に至り記念撮影をなして此行の解散をなす。筆を擱くに當り、出發より歸京に至る間多大の御同情に預りたる諸兄に對し、衷心より感謝の意を表す。(口繪参照)

(七) 遠 征 観 戦 記

(一) 對 京 都 武 德 會 本 部 戰

菅 原 生

兩軍から呼出されたのは、塾の安部に武德會の高木。安部は其の状恰も鐘槿の如く、惡鬼をも退治する様に見えたが、

如何した機か高木の内股に倒れ、先づ敵に名を成さしむ。代つて現はれたのは、曾ては岐阜中學に其人ありと知られた柿元、逸やる高木の内股を返して業を取り、續いて大外刈で之を退かしむ。味方の敵打たばやと、跳り出でたる佐伯をも何のとばかり押込み、續く坂井をも合せ葬らんと努めしも、力盡きて押込まる。宮永出で、坂井を一本背負に投飛ばし、次の松平が小内刈に攻め立てるをうまくあしらつて、機を見て飛込んだ背負に脆くも敵は赤川に代る。赤川巴を連發して宮永が倒れた處を締める。宮永逃れんと争ひしも、遂に力及ばずして退くや、武田代つて現れ互に巴を以て戦ふ中、武田の掛けたる技は業有りとなりしも、其中に時間が経て引分けは残念。新しく添野横山と戦ふ。添野の背負も勝を得るに至らずして引分けに終る。吉田出で、福島に向ふ、中々豪の者遂に締められて退く。代る松村が押され鼻を取りし釣込は、一本とならずして遂に引分けとなる。次に五島飛出で、山田を跳巻に、續く高橋を小内の返しに投げ飛ばし、三田道場の元氣振りを見せたが、黒萩段外大將の爲に締に針生と代る。針生は右の技のみを以て働く人、然るに黒萩左構にて右を取らず、引分は物足りぬ事多大。染谷は初段河村を向へ廻し、虐待したが又引分となる。

愈々有段者戦となり、審判は先生が代られる。渡部は自重してくる安藤をスツポリ巴で投げ倒し、次の戸次と引分く。肥滿せる小林は志戸本が大内刈に来る處を抱き上げ、腰投でいやと云ふ程叩き付けたが、山下の爲に締を取られて松本に代る。松本先づ跳腰に山下を屠り、續く長石をも束にせんとせしも、長石尋常の曲者にあらず、跳巻の合せ業に松本を退かし、山田久をも跳巻に投げ飛ばし、崔が落付く暇もなく不用意の處を背負でふつ飛した御手際は、敵乍ら天晴れなり。井上足拂に長石を倒せしも、道端の背負返しに高井に讓れば、高井亦足拂に脆く一本を取られて福田に代る。福田岩垂式大内刈に美事敵を打ちて三芳を迎へて戦ひ、屢々苦境に追撃すれども時間がきて勝負付かず。次の塾方は山田菊雄なり、敵方が心と頼み奮闘を期待せりと聞く中堅の三邊を拂腰に屠り、山本がおのれ我腕見よと計り躍り出づるを、物をも云はせず背負で宙返りさせ、續く檜原をも拂腰にたゞき付くれば、敵も味方も賞讃止まず。須藤は山田の誘ひに容易に乗ぜず

小内刈に阿部(英)を出さしめたるも背負に退く、天野代り出で、小内足拂の合業に更に永井に挑む。永井は跳腰に美事に投げて、河野をもと力戦せしが、河野中々の丈夫、跳腰内股と續けてかけるも旨くひねられて一本にならざるを見るや、倒れて起きたところを締に來て離さず、永井遂に負となりしは残念なり。阿部(大)漸くにて引分に終らしむ。

田中先づ返しに業を取りしも、又取り返され勝負なし。次は緩にして然も敏なる渥美、己れ大將迄抜かんと立出づれば、之に應じて公文現れ、暫時對戰の後公文背負をかくれば、渥美抱きて肩をつく、審判官は一本を宣しぬ。不幸渥美は破れたるなり。葉山は公文と引分け。藤澤と北川新しく呼び出さる。藤澤は右、北川は左の構へ、北川は今春の大會に十五六名を抜きて、特別賞を受けし豪の者なり。藤澤自重して技をかけず、とかくするや北川の思ひ切つたる濃厚な左の大外刈は段々に深くなりて、藤澤遂に敵に名を成さしむ。松永投げんと試みしも、彼恐れて右を持たせず引分けに終る。次で副將戰は開かれた。三村は十五の三段中特に選抜に因りて副將となりしもの、如何なる波亂を生むやと見る中に、岡の打ち出したる内股は、敵にさける間も與へず、投げ付けて大將福島代る。福島は長く京都に師たる者、老練なる其技術、堂々たる其取口、幾多の戦場に馳驅せし千軍萬馬の老將軍なり。然りと雖岡も去るもの、今春の講道館勝負に於て福島と對戰し、業有を取りて引分に了りし經驗を有す。今回は更に元氣横溢、今日こそはと怒髪天を衝き、激しく攻め立つれば、タヂ／＼となりて危しと見えしが、敵も中々剛の者、如何なるすきや見出しけん、左跳腰に切込めば、流石の常勝軍も不幸悲壯の最後を遂ぐ。彼が敗誠に惜みても猶餘りありと云ふ可し。

愈々大將中野馬を陣頭に進めぬ。中野はこれ吾軍の總帥なり。慶軍の興廢實に君の一戦にあり、君の使命や重且つ大也と謂ふ可し。逸る心を押し鎮め悠々として應戦す。満場の觀者此勝負や如何にと、堅唾を呑んで一舉一動も見逃すまじとすれば、兩雄互に秘術を盡して戦ふ。是れ天下の大勝負と云はずして何をか大試合とや云はん。講道館の春秋二回の紅白勝負にても稀れに見るのみ。

兩將互に奮闘するも勝負容易に決せず、時間は徒に過ぎて「もう少しで引分」の聲は審判官の口からもれる。折しも機を見るに敏なる彼中野、得意の左小外刈に敵を横に倒したるも業有りなり、更に健闘、凱歌を奏せんと力めしが、規定の二十分は來りて、茲に引分けが審判官に依りて嚴に宣せられぬ。嗚呼、吾等は會稽の恥を雪ぐ能はざりしか。

(11) 對大阪武徳會支部戰

昨日の勝負に事實上勝利を博した吾軍の猛者は、益々自信をつけて敵に向ふ。

今日先陣を承つた柿元は敵の雜兵共何かあらん、大將迄皆殺にせんものと、決心の色眉宇の間に現はると見る間に、敵の岡崎は先鋒の責任に氣後れしたるか、自分の體の崩るるをも顧みず、無暴の大外刈を連發する。之を見た柿元は待つてましたと計り、思ひ切つたる返し美事に極りて拍手先づ我軍より起る。此間僅か五十秒なり。味方の仇思ひ知れと飛出したる阿川をうまくあしらひつゝ、右釣込腰に地響打つて投付け、續く岡本をも同じ業に退かしめる。此業を見て躍り出せし中野が焦りに躁るを、時間を過させるも無駄なことに、得意の大外刈を打込めば、茫然として清水に代る。清水は稍々手應のある奴、柿元が少しく疲れたるを見てとつて、奮闘大いに力む。流石の柿元も少しく守勢を取る折柄、大外刈で攻め立てる。柿元何をと計りに返して業有りを取り、又も大外の返業に合せて一本。佐々木大勢挽回の責任を負ふて出でたり。然し其任餘りに過ぎたり、一本半の痛手をおふて引下る、五分の間奮闘せし丈が切めてもの働き。次の稻垣は、とても勝つ可き柄にあらずと悟りてか引分主義に出づ。柿元も疲れたり、自重して遂にチン／＼引分となる。見る／＼中に六人を抜いて引分けたる元氣には、敵味方の差別なく只感じ只驚くのみ。大勢已に決したるかの觀あり。新に呼び出されたるは宮永に井田なり。今度自分の番なりと計り井田の掛る業も頑丈の宮永には更にきかず、宮永が機を見て掛けたる跳腰に一たまりもなく最後を遂げる。宮永は鳥井と引分け、武徳軍よりは早くも初段小山を出したり。初段の先鋒、業の冴も

美事に安々と二人抜きたるも、巨大漢安部の自重遂に引分に終らしむ。續く吉田に小林は其力や等しかりけん、規定の時
間來るも勝負決せず。松村出で、逸る山本(多)が飛廻るを左體落に刺留たりと思ひしに、業有の宣告は、天、敵に幸せ
るか。五島、山本(加)と引分れば、吾軍の元氣者針生、敵淡路に對して宣戰しぬ。針生元氣溢るれ共、如何にせん昨日の
戰に負傷したる左足の關節未だ全快に至らず、得意の大外も、跳腰も、其銳利なる切れ味を見せる事を得ず、業有り位に
甘ぜざる可らざる遺憾さ。染谷、高穂を足拂に退かしめ、伊藤をも合せ葬らんとせしも一本にならずして引分く。敵加納
は漸くの事で渡部と引分けて引下れば、吾軍に其人ありと知られたる小林代り出で、有無を云はせず内股に矢木をふつ飛
し、續く富田が跳腰を裏投で取つて押へ、岩下二段をもと思ひしも、武士のなさけ傷を付けずして退かしむ。松本の相手
せし村上は中々の大男なり、松本が力闘を物とせず、内股に押込に之を破る。次の山田小兵なりと雖中々の古強者、大
兵の村上を手玉に取つて、大内に足拂に勝利を占めて敵膽を寒からしむ。然れ共鶴尾が支釣込足に倒れて退けば、崔代つ
て現はる。崔昨日の戰に利あらず、思はずも背負に倒る。今日は雪辱の戰なり、如何なる事ありとも三人や四人はとの意
氣込み凄く、鶴尾を大外落に、村方を大内に、次の森田三段を足拂に打取つて佐々木に向ふ。佐々木小兵なりと雖、中々
の曲者、逸る崔を後締に、井上をも締で取り、福田初段と引分く。山田(菊)昨日の奮闘に驕りてか、はた三段と見て自重
したるか、拂腰も背負も効を奏せざるに、竹垣が得意の道場の外へ押して出す小内刈に、柱に頭を打ち付けて退く。竹垣
が餘りに勝負に重きをおきたる戦法吾人之を採らず、目的の爲に手段を選ばざるは、武士道に於ける禁物なりと聞く。武
士道廢れたるか、彼未だ之を學ばざるか。阿部(英)直に小内にて仇をとりたるも、偉丈夫磯島の爲に締らる。磯島は副將
なり、今にして健闘せずんば、大坂軍の面目何處にかある、其責や大、其任や重しと謂ふ可し。阿部に代りて出でたる永
井、其體磯島に比すれば遙に小なりと雖、百戦を経たる古武士なり。屢々敵を危地に陥らしめたるも、如何にせん左内股
に倒れて止む。阿部(大)何を小癩なと背負を掛れば、ドツと計りモンドリ打つて倒れたり。折悪しく來賓席の机にかゝり

たる爲め、割引されて業有りとなりぬ、暫して後に機を見てかけたる大内刈は、不幸にして返され田中代る、田中は勝負に於ては頗る老練家なり、七分間健闘せしも遂に押込に退く。渥美出で、大外刈に攻立つれば、危き事風前の燈なり、然れ共疲れたる磯島の體は中心を失ひて鮭の如く一本とならず。今度はと大外落美事極りて一寸一息つく間もあらず、審判の無言なるを好機に締めにかゝる、渥美メンクラヒて施す術なく敵に勝を譲る。審判の正否は識者之を知る、吾人あへて之を辯ぜず。思はざる勝に元氣を得たる磯島は、續く葉山を拂腰に打取りたるも、藤澤の小内刈に倒れて退く。大將富山いよ／＼出で、藤澤を合せ業に取り、松永をもと奮戦せるも、松永も去る者、三田の道場の元氣者何條黙して止まんや、先づ小内刈に業有をとり、足拂に合せて一本。

吾軍は大將副將を残して大勝しぬ、昨春の恥は雪がれぬ。

(三) 對神戸柔道有志軍戰

敵のメンバーを見渡すと驚く程だ。計三十七段に對する當方は二十六段三級といふ割合、最初染谷は敵の先鋒を難無く合せ業に退かしめ、次の西口が必死の苦闘も其甲斐なく、引分は此方の方で残念だつた。代つて出でし柿元は、敵の高谷が元氣に任せて飛廻るを軽くあしらつて、遂に向固に押込んだは理詰の戦法なり。續く小澤をもと思ひしが、敵方の自重は引分の餘儀なきに至る。五島は吾軍の闘士吾人の期する所多かりしも止めをさすに至らず。吾初段の先鋒小林現れたり直に内股か裏投で投付けると思つて見る中に、敵も中々作戦したり、軽く避ては逃げ廻る。吾等日々處を變へて轉戦する者、敵の業を見る機會なきに反し、敵は京都に大阪に間者を放ちて防備オサク／＼怠りなかりしと見ゆ。次の山田(菊)は吾軍に其人ありと知られたる強の者、初段の大將高橋をば右の拂腰にぶつ飛し、二段の熊田と對戦すると見る間に拂腰、大内刈の合業、敵は野吹と代る。野吹は中々の曲者山田(菊)疲れたりと見るや押込みて勝ち、吾軍崔に向ふ。崔思ひ切つて

大外刈を掛れば業ありとなり、暫く戦ふ中、今度は先方の拂腰で業有を返され、遂に引分は面白き勝負。山田(久)代つて吾軍より出づ、小兵なり。敵の眞野カモと見て安心せる時も、得意の足拂に攻め立つれば、敵もたぢくとなりて躊躇ふを、大内刈の合業に宮尾代り出づ。何を小癩な此小兵奴がと打出す大内刈、直に返されて敗北の見悪さ。太田三段さらばと計り躍出で、背負で難なく打取りたるも、渡部初段の釣込腰に一敗地に塗れて退く。渡部は續く田邊をもと力めしも、田邊は敵軍中第一の元氣者にて頼とするは此人ばかりなり、體と云ひ態度と云ひ、天晴れの武者振り、大内刈に渡部敗れ、高井六十分秒を奮張りたりしも、大外刈に倒れて退く。續いて阿部(英)同じ業に二段渥美と代れば、渥美健闘屢々敵を危地に陥れ、大外刈に投げたる事兩度、更に審判官の聲なし。今度は跳腰の返し、「業あり」なり。八分を過る頃内股厄を爲して返され、敵をして名をなさしむ。渥美の如きは勝負に勝つて審判に負けたりと云ふ可し。葉山支釣込足に之を敗り、助川に締らる。田中は巧妙に立廻り、大男をして何事も爲すを得ざらしめしは流石に古狸なり。阿部(大)福井と引分れば、吾が四將藤澤敵の三將中里に對す。大内刈に業をとりしも押込れて爲す事なし。吾軍松永出で、勇を振ひて奮戦す。先づ中里を大外刈に退かしめ、渡邊をも十三分を費して締め、拍手吾軍に起る。松永次に澤田大將に向ふ。大兵にして四段の實力を備ふるもの、松永大外刈に倒れて岡代り攻む。兩雄相對したる雄姿は見るからに痛快なり。岡何事をか爲す可しと期する處ありたるに、未だ機の熟せざるに先ち、巴に浮上り涙を呑んで後退す。

かくて愈大將戰となる。吾軍の大將中野決して體格悪しと思はざるも、澤田は大兵二十四五貫を有する者、稽古も怠らずと云へば、兩四段の勝負は何とも云へぬ面白さを覚えぬ。敵は右構への極也。中野左を取つて攻む。其一進一退、見物は只固唾を呑んで妙技に酔ふ。聲なき事暫し、中野敵の力や劣れりと見しか、左を改めて右業を以て攻勢を取る。時已に遅く敵の防備堅固にして抜く能はず、規定の二十分經過して遂に引分は嚴かに宣せられぬ。

(八) 第二十七回大會

十月三十一日

普通部對商工部試合

(普通部)

(商工部)

(跳卷)

(浮腰) 外山三郎

島村長一

直木榮

田村大吉

(同押込) 高田庫重

齋藤退助

松崎泰次郎

渡邊義道

(絞) 菅原卓

山本巖

塚本敬三

三隅治義

水野亨

海保龍吉

今關清

山川昇

(絞) 石塚眞之助

長塚龜三郎(押込)

田中哲郎

高橋長治

(押込) 今英吉

木村英智(押込)

副將 茂木邦吉

川崎八治

(大外刈) 菅原浩

宮田位次郎(大外返)

大將 阿部大六

副將 森永義忠

(同跳卷) 跳腰返

三本勝負

(有級者)

(附中) 鶴田裁太郎

○早實

廣瀬長治(小内刈)

(高輪)

川村福太郎

○木村英智(跳卷)

○

長塚龜三郎

x

高田庫重

(海城) 西村 太平
(四) 齋藤 三郎 (大外)

(附中) 山口 四郎 (背負)
(五) 渡邊 義道

(錦城) 今井
(六) 田北 隆美

(大成) 大瀧 正二郎
(七) 菅原 卓

(大成) 熊谷 衆一郎 (大内)
(八) 竹内 光一

(高輪) 曾山 長松
(九) 三隅 治義

(早實) 鷹取 堯一
(一〇) 山川 昇

(深田) 平澤 諒
(一一) 松崎 泰次郎

(附中) 田代 秀德
(一二) 長谷川 彌馬太

(海城) 太田 憲昌
(一三) 直木 榮

(農大) 田邊 松彦
(一四) 七條 清則

(早實) 山田 武雄 (小外刈)
(一五) 清水 行信

(水産) 永井 福三郎
(一六) 田中 哲郎

(水産) 石田 壽之
(一七) 西岡 誠一 (合技)

(早大) 一瀬 亮一 (巴投)
(一八) 大塚 巳之助

(深田) 金坂 直温
(一九) 吉田 精二

(高工) 松田 重勇喜 (跳腰體落)
(二〇) 武田 正俊

(高商) 佐藤 陽二郎
(二一) 茂木 芳次郎 (跳腰)

(講) 松本 (押込)
(二二) 正部 家種 近

(日宗) 高 政治
(二三) 岩崎 清二郎 (大外)

(高師) 菊盛 安
(二四) 添野 郁 (大外背負)

(高師) 服部 哉
(二五) 針生 五郎 (跳腰大外返)

(高師) 馬場 富雄
(二六) 五島 一男

(深田) 橋本 信二郎
(二七) 石原 莊介 (跳腰)

(高商) 小島 爲近
(二八) 川崎 八次 (合技)

(日宗) 山中 鳳 樞
(二九) 森 永義 忠 (跳腰押込)

(獨協) 立澤
(三〇) 松村 繼彦 (絞)

(早大) 庄村 銀一

(三二) 安部 登(内股)

(高工) 齋藤 憲一
(三二) 染谷 芳藏

(有段者)

小川虎之助

○浅田 甫(中央)

小川君大内刈の返して業を取つたが、足拂で業をとられ、小内刈に

一本をせしめられて遂に敗れた。

松本篤太郎

○星子 廉(農大)

松本君は肩を痛めて居たので大した奮闘が出来なかつたらしい。然

し講道館の秋季紅白勝負で四人を投げた豪の者をよくあしらつて、跳腰で立派な業をとつた。小内刈に敗れたけれども松本君の弱い爲ではない。

○花田重起

石井正俊(高帥)

花田君大外刈及び跳腰で業あり、時間になつたので合せ業で勝利を得

た。花田君は我最初の勝利者であつた。

○井上敏夫

三須堯三(學習)

井上君は學習院の公達三須君を見事に背負ひ、それから左の送り足拂

で二本取つた。背負をかけた時、敵が顔を疊にすりつけたのは氣の毒であつた。

天田錦之助

○仁木堯將(日宗)

天田君先づ跳腰に敵を誘ひ、足拂に逆撃し来る敵を受けて、再び跳

腰に業有りを取り、尙突進を試みたけれども、敵の背負に不幸一本獲られて一本勝負。

○菅原剛寛

○野津雄二(獨協)

内股に見事一本を取つて、再び袈裟固に敵を押へ、二本取つた内股

一本取られてやつたのは、情を知れる武士の心であつたかも知れぬ。

○渡部奉綱

河野兵造(高工)

がんもの名を頂戴して居る丈あつて、渡邊君は高工の河野君を鴨扱し

た所は其名を辱めざるものであつた。巴で業を取り、釣込腰に見事一本、首投で又一本、鴨は哀れやその屍を疊の上に横

たへた。

高井孝一——×——山 本(講) 我れ小外刈、釣込を以て攻勢に出たけれ共、敵は自重の態度に出たのは、

高井君の大軀を如何ともする事が出来ないと見て取つたらしい。悲しい哉高井君も自重した爲か、元氣がなかつたのか、あまり振はなかつたのは残念であつた。

○山田久一——×——○岩崎喜三郎(農大) 吸い付いたら離れない久さんの足拂は、農大の岩崎君を丁と投げ

た。敵も大外刈に一本を占め、「勝負」との審判官の聲に、共に帯を直して戦ふ事暫時、ねばり付く足は間斷なく敵を危地に陥らしめたが遂に引分となつた。敵は巴で業を取つた。

福田興志三郎——○大西計一(早大) 勝負には大概負けた事のない、頸の太いので有名な福田君は、今

日は如何しけん、敵の爲に大外を一本取られ、福田君の背負も其効なく、終に一本勝負に敗を取つた。

○阿部英兒——東海進藏(高工) 英ちゃんは大内で業あり背負落一本、一本勝負で我は勝つたが、も一

本見事に投げてもらいたかつた。

○小林武次郎——坂入安一郎(講) 味方の例の落着いた態度で敵を拂腰で、一本軽く投げ付けた。敵は

稍憤慨した形で攻めて来るも、我には餘り手應へをおぼえず。小林君が肩を打つて顔をしかめた所、其虚に付け入つて敵は身分不相應にも腰業に攻撃を開始して來た。我左手が敵の横帯の邊に行つたと思ふと移腰、敵の眼は半廻轉位したらしかつた、美事に二本我の勝。

阿部大六——×——南部要次(講) 互に秘術を盡して戦つたが、終に引分に終つたのは残念。

永井元孝——×——小 林(明大) 我は小外刈の返しに業を取つた時、敵は押えに來た。永井君終に敵の爲

に封ぜられんとした時、さつとはね起きた所抔は、君の老巧な所を示すものであらう。

◎葉山健二郎——×——五十嵐豊次(農大) 敵味方共に好く戦つたが引分に終つた。

◎山田菊雄——箕作秋吉(講) 先づ拂腰で敵を空中より墜落せしめ度肝を抜いて、再び攻めんとすれば、

敵は喰ひ下りて之を防がんとする。然し特選の山田君にはそんな事は關係なきものの如く、左右の拂腰は再び敵を空中に舞はしめて二本を得た。

崔燦鶴——×——岡崎 運(講) 共に數多の業を出し、ひやく／＼させる事數回、終に引分。

渥美得一——×——酒巻琢一(早大) 敵は逆に逆にと攻め來るを渥美君よく應戦し、跳腰で突進を試みたるも敵は腰を後方に引きて防戦したる爲め其効なく、終に敵は汚なく引分けて了つた。

藤澤 隆——◎箕輪平藏(高師) 敵は有名な小内刈上手で、初めての者は大抵一杯食されるとの評判で

あつた。が我藤澤君なれば大丈夫と、一同安心して形勢を眺めて居つた。所が敵の小内刈は妙な所があるのか、残念にも我は二本迄も同じ手に斃れるの不運を見た。藤澤君も跳腰等を以て攻撃したけれ共、敵を斃すに至らなかつたのは残念であつた、寧ろ我の守勢に出たのは誤りであつたかも知れない。(田中生)

(九) 雜 記

普通部の信越地方遠征

新に年を迎へたる普通部及び商工部勇士の面々、新春匂々の元氣を試さんと、一は信越地方、他は甲信地方の遠征に上つた。

信越地方に向ふ普通部々員十六名の若武者は、出陣作戦の用意萬端を整へて、岩崎三段松永二段兩氏監督の下に、一月

四日三田山上を出發した。上野驛より先づ若松市に到りて、聞きしに優る大敵會津中學と戦ひ、大將副將を殘して大勝し、進んで越後三條に向ひ、六日雪の降る日を三條中學と戈を交へた。雙方力を盡して鬪ふこと約一時間半、相手如何に防戦に努むるも、遂に阿部(大)五將が、敵の三將副將を抜き大將と引分を取つて、こゝでも優勝した。勝に乗じたる我が遠征軍は、更に一驅して長岡中學を襲ひ、翌七日の戦に於て阿部(大)五將又もや敵の大將まで三人を投げ飛ばして、三度まで凱歌を揚ぐ。この日先輩山田又司氏の響應を受けたる後、次なる戰場高田に到りて投宿した。

明れば八日、この日先づ遠征軍を途に要撃せんとして高田まで出張されたる柏崎中學を破り、續く高田中學をも難なく屠りて、北國スキーの快に親しみ、直に長野をさして最後の戰場に向つた。長野に到りて、遠征軍別働隊の商工部の人々と落ち合ひ、互に明日の作戦を練つて寝に就いた。

翌朝起床匆々名高き善光寺に參詣し、それより長野商業と我が商工部の對戦を見、正午一休みして午後三時半長野中學に行き、試合は四時から開始された。同校は先年我が商工軍を一敗せしめ、昨日は又今回の別働隊たる商工軍と引分を取りたる強の者揃ひ、されば普通部軍にありては、一層兇の緒を締めて、僚軍の仇を報ずる機會を逃がすなと力戰奮闘、その功空しからず、副將中村敵の大將を見事に倒して、最後の榮冠を握つた。

斯くて六戰六勝の大捷を博したる遠征軍は、その夜祝賀會を開き、長野の選手も來り會して、天地も爲めに破れんばかりに歡興を極め、愈々午後十二時發の列車に乗り込み、北國に別を告げて歸京の途に就いた。

一行の選手左の如し。

初段 阿部英兒、中村武雄、崔燦鶴

一級 高鹿正夫、阿部大六、高田與四郎

二級 茂木邦吉、今關 清、塚本敬三、田中哲郎、相澤 一、室町三郎

三級 菅原 浩、松崎泰三郎、直木 榮、今 英吉
戦績一覽

〇〇〇〇
〇〇〇〇
普通部

●	●	●	●	●	●
長	高	柏	長	三	會
野	田	崎	岡	條	津
中	中	中	中	中	中
學	學	學	學	學	學

商工部の甲信地方遠征

甲信地方に向ふ商工部の遠征軍は、普通部軍より二日遅れて一月六日三段中野森藏、二段神崎清一兩氏に引率されて、選手左の十五名、早朝六時新宿驛に勢揃ひして、勇ましく出發した。

初段 福田與志三郎、進藤 茂

一級 森永義忠、川崎八次、染谷芳藏

二級 中村隆一、高橋長治、前田誠一郎、五島一男

三級 宮田位次郎、金澤勇之助、渡邊義道、山川 昇

四級 長塚龜三郎、三隅治義、木村、英智

甲府に着いたのは正午、直に晝飯をとり、午後一時より同地文武館に於て中野三段審判の下に、甲府中學との試合が開

始された。此の戦餘り敵を重く見た爲めか、旅の疲れか、場慣れぬ爲めか、我が軍一體に振はないやうであつた。併し大將森永を残して、先づ戦勝の一點を挙げ、盛なる見送を受けて、午後五時七分の汽車に乗じ、諏訪に着いたのは八時であつた。

七日、諏訪中學との試合は先方人数不揃の爲めに中止となり、残念ながら稽古もせず、二時頃までスケートを遊び、再び列車の人となり、長野に着いて一泊した。

八日、午後一時から中學の道場に出掛けた。明るい廣々とした立派な道場だ。中學の照山部長の挨拶があつて勝負に移つた。對手は未だ一回も他校に敗れたることなき名だたるもの、遂に大將同志の接戦とまで進んだが、我が軍は先年の雪辱をもなすで残念にも引分に終つた。午後八時全勝の名譽を得たる遠征先發隊普通部選手一同を停車場に迎へ、同じ宿屋に集まつたから堪らない。歡談笑話愉快なる一夜を過ごした。

九日、十時より長野商業の道場へ行く。双方十六名づゝにて對陣し、廣岡五段、中野三段交互審判の下に試合は開始された。その結果三隅、五島、中村、森永等の諸氏の奮戦により三名の不戦者を残して立派に勝つた。試合後普通部軍選手に見送られ、急遽上田に向つた。二時上田着蠶絲専門學校と試合をなす筈の處、同校は未だ休暇中とて、残念ながら先方の腕を見ることが出来なかつた。

十日、この日上田中學との試合は午後四時よりなれば、午前中多くはスケートに行き、晝には久し振りに肉にありついた。試合の時刻切迫したれば、我が勇士は此の遠征に於ける最後の奮闘をなさんものと、意氣衝天の勢を以つて道場に飛込んだ。其處には既に多數の見物人詰めかけて戦はざるに上田軍の聲援中々盛んであつた。中野三段審判の下に戦端は開かれ、三番目に出でたる三隅早くも二人を倒して三人目と引分け、其他は全部引分け、最後に四將森永敵の副將を投げ飛ばし、進んで大將と渡り合ひ、勝負つかずして、亦復三將の不戦榮譽を我に歸せしめた功は偉大であつた。今回は四戦し

デザートコースに入るや、中野幹事現部員を代表して挨拶を述べ、堀切、吉武、湯本、近藤四氏の答辭あり、次に吉武氏緊急動議ありとてやをら身を起し、當代の誤れる傾向を慨し、團體的精神を發揮するが爲に、柔道部員は宜しく京都遠征の再擧をなし、以て我が黨の意氣を示されんことをと希望し、それより中村、柴田、堀切三氏交々立ちて、體育會に對する義塾當局者の態度に就て、討論的熱辯を振はれ、滿座爲に大なる感動を與へられたると同時に、其熱烈なる先輩諸氏の愛塾愛部の焔は、人々の胸にも等しく燃え立たされた感があつた。實に稀に見る程活氣に満ちた有益なる會合であつた。

普通部對海城中學試合

六月十四日當方道場に於て、普通部は二段一名初段一名以下二十人、海城は初段四名以下十八名を出して試合を爲す。戦績は兩軍一進一退の勢で進んだが、遂に我が副將敵の副將を仆して大將と引分けとなり、勝利は我が軍のものとなつた。

諸校大會に於ける部員の成績

毎年都下諸學校の大會には、我が部よりも選手を派遣してゐるのであるが、記録には簡單に派遣の事實のみを示すに止まるか、又は勝ち負け位のことを記してあるに過ぎない。然るに本年度の各學校大會に於ける部員の成績に就ては、對手の氏名を擧ぐると共に、その奮闘振りをも相當詳しく記してゐる。左にその記事を掲ぐ。之に依りて他校大會の模様をも察知することが出来ると思ふ。

▽二月三日 駒場農科大學

農大の正門を入ると何となく御百姓様の氣分が満ち／＼してゐる。道場も失禮乍ら餘り立派ぢやないが五十疊位はあつた。

有級者三本勝負が三十組終ると、會長から型の如く挨拶があり、有段者三本勝負に入る、時に午後四時。

初段中村武雄——×——初段高廣三郎（早大） 有段者勝負の第一回は中村君と早大の高廣君だつた。中村君先づ左跳腰を一發御見舞したが、左手の引がきかなかつた爲めか、危い所で敵は一命をとり留め、腰を引き當然来る運命を期待し乍ら、御役目のやうな小業で攻めて居る。全く今日の勝負を見物した人は皆君に同情した。右左の跳腰に攻め立てたが、遂に時來りて引分けは是非もなし。

○二段松永進一——×——○二段片桐貞之進（高師） 有段者勝負も最早や最終となり、薄暗い道場には殺氣が充ち満ちて居る。片桐君は高師の強者、我は綱町道場に於ける頗る附の元氣者。互に死力を盡して相争ふ様實に壯觀であつた。松永の右自然體に隙を生ずるや、電光石火の如き敵の跳腰極まつて拍手起る。松永立つや己れツとばかり、此儘退いてなるものか、三田道場で鍛へ上げた名刀の切れ味を知れと、強引の右内股にて美事一本。見物人の興はあとの二本目に集中されたが、時至りて引分けとなる。

▽二月十一日 明治大學柔道大會

明治の道場は六十疊餘の新しい道場である。塾の道場で人となつた服部君や關川君が居るので愉快だつた。三十九組の有級者勝負を終つて、午後四時頃有段者勝負に入る。

初段阿部英兒——×——初段中村英二（明大） 英ちゃん近頃目方もついたし、勝負の経験も積んだので、君が戦場に出る時は相手の如何を問はず安心する。今日の敵も弱くはないが、小内に大外に二太刀三太刀切り合つた時、無論味方のものときめてしまつた。時しも君が思ひ定めた右大外の一發、見事極まりしと思ひきや、敵右手をつきて痛み分けは實に残念。

○二段松永進一——二段鈴木誠則(明大) 兩方共に躰軀伯仲の間にあり。敵は自重して襟を取らせず、

極端なる右自然體にて小内、大外にて攻立て来る。松永未だ業を出さず、やがて松永右襟を深く取ると見るや、右跳腰に美事射留めた。敵もさる者、かくてはならじと矢つき早やに攻め立て来るを軽く受けて、又跳腰に業を取る。

▽四月廿九日 深田道場大會

今まで深田道場の名をよく聞いて居た、又毎年塾の大會にもよく選手を派遣して来たから、可成りな道場だらうと思つて居たが、百聞は一見に如かず、今日大會に行つて同道場の由來と入口の立派なのに驚いた。道場の廣さは五十疊位だが中々盛大なものだ。無段者勝負三十二組、有段者勝負十八組、塾からは五島一男、宮永金太郎兩一級、初段阿部大六、二段松永進一を派遣した。

◎五島一男——○吉川令夫(深田) 五ちゃんの近頃の元氣はへボ初段ぢや一寸おつゝかない。何と云つ

ても君の今日の天晴れな勝負振りは、御母様に見せて上げ度い位だつた。相手の吉川は確かに弱くはなかつた。僕は此勝負を非常な興味を以て拜見した。前進後退ししばし、やがて敵の背負功を奏して一本。五島君落ち付きはらつて元氣があるのかないのかわからない。時しも敵の虚を突く見事な跳腰極り、續いて打出す足拂に一たまりもなく屠り去つた。實に溜飲の下がる様な此勝負、五ちゃんも近頃メツキリ腕を上げたね、黒帯の御見舞も近い内だよ。

宮永金太郎——◎芳賀丈夫(深田) 君の近頃の元氣から云へば、此勝負は無論右跳腰か、又はあの猛烈

な背負で敵をたゞき付ける處だつたが、意外にも跳腰、背負で二本とも敵に名をなさしめたのは少しアツケなかつた。我輩をして君が戦振りを評せしむれば、餘りに勝を急いで却つて敵に乗ぜられたと云ひ度い。

初段阿部大六——×——初段小川虎之介(深田) 冬季休暇の北國遠征の際に、普通部の五將として信越地方に

勇名を馳せた君、相手が熊だらうが虎だらうが一向恐れない、あの冴えた、左背負に葬り去るだらうと思つたが、切れなかつた最初の一發にすつかり敵は恐れて更に戰意なく、腰を引いて徹頭徹尾大事を取つたので、遂にチン／＼の時來り、引分けは甚だ遺憾だつた。

○二段松永進一——×——○二段居藤高季(深田) 敵が右大外で一本取つたら、怒髪天を衝く勢で立ち上り、右跳腰で見事に投げたが、時來つて一本一本の引分となつた。(以上M生)

▽九月二十九日 學習院

燬くが如き眞夏の盛りから汗みどろになつて稽古した我柔道部關西遠征が、京大阪神戸に勇を振ひ勝利の榮冠を得て凱旋した翌日、天は何となく凄慘の氣を帯び、大暴風雨襲來の警報が各所に見えた。此の日朝から雨はどしや降りて止みさうもない。田町から山の手線で行く。着いた時勝負は丁度面白い最中であつた。愈々我が一級五島一男君は學習の一級の重鎮小出經英君と雌雄を決することゝなつた。相手は體は大きく馬力も相應にあつた。五島君始めは元氣で、勝はこつちのものと思へたが、旅の疲が充分癒へぬと見へて、遂に敵に名をなさしめたは残念だつた。有級者の勝負終りて本田先生の挨拶あつて愈々有段者勝負となつた、我初段福田與志三郎君、早大大西計一君と對す。敵士背は少しく福田君より高く腰も中々しつかりして居た。體軀小なりと雖も氣の勝つた福田君の打ち出す大内刈も、先日來の腸の病に氣揚らず、敵を危き處まで攻めながら逃してしまひ、時來りて引分は見居ても残念だつた。

▽十月十三日 獨逸學協會學校中學

電車を江戸川の終點で降りて橋を渡り、左の急な坂を上ると、右側にあるのが即ち獨協の校舎だ。獨逸は敵方でも獨逸

語によつて科學を學ばんとするに何の差支もない。現に慶應には獨逸語を教授して居る。獨逸は道を探ねる必要がないまでに好く道案内が出来てゐる、其眞似をしたわけでもあるまいが、正門を入ると直ぐ接待係の人が居て案内してくれる。僕の様に不案内の者には至極結構。入口の表札を見る要もなく休憩室に入つて休んで居ると、間もなく勝負が始まる。有級者三本勝負三十一組、皆一方の相手は獨協だ。然し有段者十四組の中、只一組丈け獨協が相手をして居るのみ。申學としては止むを得まい。有級者勝負に續いて部長挨拶、柔の型、投の型、五の型、固の型あり、次の有段者勝負の後、藤生三段の五人掛があつて終了した。本塾からは次の二氏が派遣された。

初段菅原剛寛——×——初段袋野元一(統一舎) 渡邊君の代りだ。相手は君よりも大きい。一級の時なら右の内股かなんかで投飛ばすんだが、何しろ初段になつての初陣だから、どうだらうと見て居ると、君が自重して業をかけたのに、相手は右の跳腰を矢繼早にかけてくる。受太刀になつた所を業有りを取られた。これではならぬと思ひ切て右大外刈に行つたが、來賓の所だつたので割引の業有り、更に打出す内股、跳腰も功を奏するに至らず引分けは物足らぬ。君は昇段して氣後れがしてゐる處へ、關西遠征で面白い勝負計り見たものだから勝負に考へ過ぎる。又一級の時の様な氣分になり給へ。

◎初段山田久一——初段外崎 某(中央大) あぶなく君を抜きにして二段戦に入らうとしたが、やつと相手を見出しての勝負、餘り大きくなくて手頃の鴨、それに關西遠征以來すつかり自信をつけたので縦横に活動、先づ大内に正宗の切れ味を見せ、すぐと足拂で二本。全くあれぢや敵も業を出す暇なんか無い、見て居ても痛快だつた。もう少し手應へのあるものを投げる處を見せてやりたかつた。

▽日本大學

中野正三さんを師と仰ぐ日本大學柔道部の大會へ阿部大六、阿部英兒兩二段を派遣した。(月日不詳)

○二段阿部英兒——二段川本道藏(日大) 君の今日の相手は鴨だつた。大外で一木、二本目は背負で。

○二段阿部大六——×——○二段上子三省(講) 今日も相變らず奮闘したが、相手も講道館の剛の者、遂に一木一本の引分けに終つた。

彼は右の内股を我は左の背負投を得意とす。襟の取り合ひに時を費やす事寸時、敵右襟を取るや逸早く内股に業を取りあと半分とあせる所を、我れ送足拂に美事一本、續いて背負に業を取る。敵もさるもの我的出鼻を同じ足拂に一本。遂に時至ての引分は、力の入つた勝負であつた。(以上同行者の一人)

進級一括

○一月十日講道館鏡開式に於て

初段へ 高井孝一、高地萬里、間中 廣、阿部大六

二段へ 葉山健二郎、尾山和男、永井元孝、津守 純

三段へ 小山内信、幸田 義、坂東舜一、尾上繁二、岡安寛司

四段へ 中野森藏

○二月二十日の進級者

二級へ 片山秀次郎、松崎泰次郎、山川 昇、山本 清

一級へ 針生五郎、添野 郁、五島一男、安増潤一郎、宮永金太郎、清水行信、篠田富士雄

○二月二十五日の進級者

一級へ 中村隆一、前田誠一郎、茂木邦吉

○二月講道館昇段式に於て

初段へ 高鹿正夫

二段へ 佐々木平太郎、中山信市

○五月十日の進級者

二級へ 菅原 浩、今 英吉、直木 榮

一級へ 高橋長治、西岡誠二、佐藤 權、大塚巳之助、今關 清

○六月四日講道館昇段式に於て

初段へ 松本篤太郎、菅原剛寛

二段へ 阿部大六

○六月十五日の進級者

二級へ 石原莊介(編入)、長谷川彌馬太、渡邊義道

○九月十日の進級者

一級へ 安部 登、柿元 魁

○十月六日の進級者

二級へ 石塚眞之助、森下 宏

一級へ 七條清則、三村徳五郎、正部家種近、篠田理策(編入)

○十月二十八日講道館紅白勝負の成績に因る昇段

初段へ 三村徳五郎

二段へ 山田菊雄、崔燦鶴

○十一月九日講道館昇段式に於て

初段へ 安部 登、宮永金太郎、添野 郁、五島一男、針生五郎、瀧川純三、森永義忠、染谷芳藏

二段へ 渡部奉綱、山田久一、小林武次郎、福田與志三郎、大原幸太郎、阿部英兒

○大會勝負の結果

二級へ 木村英智、齋藤三郎、田北隆美

一級へ 安高又三、森下 廣

○十一月二十二日の進級者

二級へ 伊藤健治、藤森賢三、小柳 博(編入)

一級へ 菅原 浩、塚本敬三、長谷川彌馬太、小早川精一